

コロナ禍での市町村における臨地実習での学び －学生記録の内容分析とインタビュー調査からの検討－

渡部 幸子¹⁾, 大澤 豊子¹⁾

了徳寺大学・健康科学部看護学科¹⁾

要旨

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により大学での授業はオンライン中心で、公衆衛生看護学実習は臨地実習と学内実習の組み合わせとなった。通常ではない環境下である「学内と臨地の組み合わせ実習」を経験した学生がどのような学びを得たのか、卒業生からのインタビューで検討した。今後も、起こりうる臨地実習の困難な状況での実践能力のある保健師育成の基礎教育について示唆を得ることを目的とした。その結果、学生時代に学んだことは統合され、卒後には良かった点として、「仲間との協力で困難を乗り越えた自信」「実際に臨地に行ったこと」「社会資源の理解」「学生時代に実際に行ったこと」という4つのカテゴリに分類され、苦労した点では2つのカテゴリに分類された。その中で、通常ではない「学内と臨地の組み合わせ実習」であるからこそ学べたことは、仲間と会えないからこそ工夫しながらグループワークを行うチームワークの重要性であった。そして、結果的に困難を乗り越えた自信や仲間との協働の大切さという人間の成長を促していた。

キーワード：保健師基礎教育、卒業後、学び、コロナ禍

Learning from clinical training in municipalities during the corona crisis -Analysis of the contents of student records and consideration from interview surveys-

Sachiko Watanabe¹⁾, Toyoko Osawa¹⁾

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University¹⁾

Abstract

Due to the spread of the coronavirus (COVID-19), classes at the university were mainly online, and public health nursing practice was a combination of clinical practice and on-campus practice. Through interviews with graduates, we will examine what kind of learning students who have experienced "combination of on-campus and clinical training" in an unusual environment, and find out the difficult situations of clinical training that may occur in the future. The purpose of this study was to obtain suggestions for basic education for cultivating public health nurses with practical skills. As a result, I was able to integrate what I had learned during my school days. They were categorized into 4 categories, "What I actually did in the era", and 2 categories for points that I struggled with. Among them, what I was able to learn because it was an unusual "combination of on-campus and on-site training" was the importance of teamwork, in which group work is done while devising ideas because it is not possible to meet with peers. It encouraged the growth of human beings through self-confidence and the importance of cooperating with peers.

Keywords: public health nurse basic education, post-graduation, learning, corona crisis

I. 緒言

1. 研究の背景

2020年からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）（以降、COVID-19と明記する）の感染拡大により、大学の授業はオンライン授業に変更された^{1) 2) 3)}。看護学の実習において、全国で実習の変更を行った大学は90.5%であり、その内学内実習に変更した大学は74.2%、遠隔実習を取り入れた大学は47.0%となっており、臨地実習を通常通り実施できていない状況がみられた⁴⁾。また、学内と臨地の組み合わせ実習が、今後の実践力の育成にどう影響するか経過を追う必要があることも指摘する意見も見られていた⁵⁾。このような学習環境は、COVID-19拡大前の大学教育において皆無であると考え、また、2020年度の保健師課程における市町村の臨地実習は、COVID-19の感染拡大により、当初の計画から延期となり、実習日数も大幅に減少するなど、大きく変更された。

A大学の2020年度の授業は、前期にはオンライン授業、後期は感染予防を徹底しての対面授業が開始された。それに伴い、前期に予定されていた公衆衛生看護学実習の臨地実習は、前期から後期へと延期になり、実習日数も短縮された。今後もCOVID-19の感染拡大の終息に予測が立たないことから、後期での臨地実習の実施が危ぶまれる状況であった。そのため、前期に学内実習を計画し実施した。後期には、実践現場である市町村は、将来の実践能力を備えた保健師の育成のために、COVID-19の蔓延状況を見据えながら、可能な範囲で実習を受け入れる体制の整備の協力により、臨地実習が可能となった。

A大学の保健師教育は、統合カリキュラムであり、2年次終了時に選考試験を受けて入学した学生が3年・4年で専門科目を履修していた。2020年度は、全国的なコロナ感染拡大により、教育現場では大きな変化を伴うことになった。授業はオンラインが導入され、また、看護師や保健師の教育に必要な臨地実習でも、中止や延期によって、体験学習の不足が起こり、学修に大きな変化をもたらした。その中で、A大学の市町村実習は、実習場所によって半日から4日間と幅があり、体験内容にも差が生じた。筆者ら⁶⁾が行った2020年度の「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度」からも、平常時の全国と比較して学内学習で強化された「健康危機管理」に関する項目は低下せず、逆に効果的であった数字がみられたが、家庭訪問や事業内容については、学生自身が一人で行うことができると判断している学生は少なかった。実際の体験がないことが不安につながり、達成度の判断に影響したことが考えられた。2020年度の卒業生は、COVID-19の感染拡大前に1年・2年・3年を終了しており、4年で保健師教育の科目で残っていた科目は、公衆衛生看護管理論と公衆衛生看護学実習Ⅰ（行政）・Ⅱ（学校・産業）であった。

そのような実習環境の中、学内実習の学びは大きな成果はあったものの、臨地実習でなければ体験できない現場での臨場感や保健師の住民とのかかわりや信念などを体験することはできなかった⁶⁾。2020年度の実習は「学内と臨地の組み合わせ実習」であることから、この実習での学びがどのような結果であったのか、そして今後どのように影響していくのかという経過を追っていく必要はあると考える。

本研究では、このコロナ禍における実習状況を体験した卒業生が、卒業後に学びとして習得したものを検討し、今後の保健師基礎教育への示唆を得ることを目的とする。

2. 目的

本研究では、コロナ禍の中での「学内と臨地の組み合わせ実習」を経験した学生の臨地実習の学びにより検討をし、実践能力のある保健師育成の基礎教育についての示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象

2020年度のA大学の保健師課程の卒業生で、看護師または保健師として就労している者29名のうち本研究への同意を得た 7名

2. 調査方法

1) 実施期間：2021年9月～11月

2) インタビュー調査は、20分間の半構造化面接によって行った。オンライン会議システムの一つであるZOOMまたは対面形式で行い、ZOOMまたはICレコーダーによって録音を行った。

3) 半構造化面接の内容は、4項目とした。

- ①臨地実習は何日体験したか。
- ②体験できたことで現在よかったと思うことは何か。
- ③苦勞したことや大変だったことは何か。
- ④その他印象に残ったことなど自由意見とする。

4) 学生の記録（臨地実習終了後レポート）

3. 分析方法

1) 学生の記録（臨地実習終了後レポート）の内容分析を行った。

2) インタビューの録音したデータの逐語録を作成し、類似する内容を抽象化し、カテゴリ化を行った。内容の妥当性を検討するため、研究者間で討議した。

3) 学生記録の内容分析とインタビュー結果とを検討し、学びの分析を行った。

4. 倫理的配慮

インタビュー開始前に、参加の途中での撤回の自由について伝え、すべての研究対象者から書面で同意を得た。本研究は生命倫理研究審査として了徳寺大学倫理審査委員会により承認を得た。（承認番号：21-05）

5. 利益相反

この研究における開示すべき利益相反(COI)状態はない。

Ⅲ. 研究結果：研究等の結果

1. 現在の対象者状況

看護師 6名（急性期5名 慢性期1名） 保健師 1名（行政）

2. 市町村実習の実施状況

対象者の市町村実習の状況は、0.5日～2日臨地での実習を行った。臨地実習が0.5日の卒業生は地域診断・健康教育の発表とその後のカンファレンス、1日～2日の卒業生は、地域診断・健康教育の発表に加え、母子保健事業の見学実習を行っていた。

3. 市町村実習のまとめの記録

市町村実習のまとめの記録から、学びについて内容分析を行った結果、7つのカテゴリに分類され、「保健師の役割」、「信頼関係の重要性」、「五感を使った地区踏査」、「ネットワークを構築」、「対象把握の視点」、「わかりやすい健康教育」、「ニーズに即したサービスの提供」であった（表1）。

「保健師の役割」では、『住民の持つ力を活かす』、『住民の近くにいる存在』、『法に沿って根拠ある活動をする』があった。

表1 学生の実習レポートから市町村実習での学び

カ テ ゴ リ	内 容
保健師の役割	地域住民の主体性と住民の持つ力を活かす サポートしていく立場 住民の近くにいる存在 より身近で感じた地域特性や住民の声から健康課題を考えていく 住民の動機づけや促しの役割 法に沿って根拠ある活動をする
信頼関係の重要性	住民を理解することや指導を効果的に行うために必要である より効果的な健康教育を行う上で重要である
五感を使った地区踏査	歩いて五感を使ってアセスメントしていく 地域に出向き、様々な人の話を聞く 現場を見つめ五感を使って情報を収集する
ネットワークの構築	地域特性を個人の健康問題と関連付けて地域に合わせた保健師の活動 専門職種との連携
対象把握の視点	個人・家族から集団・地域に広げる
わかりやすい健康教育	面倒くさくても、何度も作り替えながら、目的を理解してもらうことの重要性 住民の抱えている不安や相談を踏まえて少しでも安心して自宅で過ごせるよう媒体を作成していく 聞く側の立場に立って試行錯誤した経験は貴重だった 時間配分や見やすさの追求、わかりやすい内容をみんなで考えていく
ニーズに即したサービスの提供	地域の健康課題とニーズに即して提供する

「信頼関係の重要性」では、『住民を理解することや指導を効果的に行うために必要である』ことや体験から感じた『より効果的な健康教育を行う上で重要である』の記載があった。

「五感を使った地区踏査」では、『歩いて五感を使ってアセスメントしていく』ことや『地域に出向き、様々な人の話を聞く』という記載があった。

「ネットワークを構築」では、『地域特性を個人の健康問題と関連付けて地域に合わせた保健師の活動』、医師や看護師などの『専門職種との連携』があった。

「対象把握の視点」では、『個人・家族から集団・地域に広げる』があった。

「わかりやすい健康教育」では、『面倒くさくても、何度も作り替えながら、目的を理解してもらうこと』、『住民の抱えている不安や相談を踏まえて少しでも安心して自宅で過ごせるよう媒体を作成していく』というような『聞く側の立場に立って試行錯誤した経験』が良かったと記載があった。

「ニーズに即したサービスの提供」では、『地域の健康課題とニーズに即して提供する』ことであることがあった。

4. 半構造化面接の結果

1) 体験できたことで現在よかったと思うことは何か

就労している卒業生が、現在、よかったと思っていることとは、「仲間との協力で困難を乗り越えた自信」「実際に臨地に行ったこと」「社会資源の理解」「学生時代に実際に行ったこと」という4つのカテゴリに分類された(表2-1)。

「仲間との協力で困難を乗り越えた自信」では、『努力して結果を出せたのが自信』、『仲間とともに目標達成するという努力も学んだ』、『オンラインだからこそみんなで協力しながら頑張れた』ことであった。

「実際に臨地に行ったこと」では、『百聞は一見に如かず』、『空気感・雰囲気分かった』、『地域診断をして、健康課題を抽出して保健師活動がある』、『よりよく生活できるように考えるようになっていく』、『保健師という職種の選択肢が残されている』と感じていた。

「社会資源の理解」では、看護師として働いているときに『退院後の生活が想像しやすい』、『退院後の支援方法』、『退院のサポートが必要になるときの制度』がわかっていることがよかったと感じていた。

表2-1 卒業後インタビュー調査（現在、よかったと思っていること）

カテゴリー	内 容
1.仲間との協力で困難を乗り越えた自信	<p>努力して結果を出せたのが自信</p> <p>仲間とともに目標達成するという努力も学んだ</p> <p>仲間と一緒にやってきたことで、大変なことも乗り越えられるんだという自信</p> <p>オンラインの実習だからこそみんなで協力しながら頑張れた</p> <p>チームでメンバーと一緒に地域のことを分析したりする</p> <p>一緒にやった健康教育や地域診断など知識が身についた</p>
2.実際に臨地に行ったこと	<p>実際の保健師さんの様子が今でも目に浮かぶ</p> <p>百聞は一見に如かず</p> <p>見学することでイメージつきやすかった</p> <p>空気感・雰囲気が分かった</p> <p>独自の話が聞けて良かった。</p> <p>地域診断をして、健康課題を抽出して保健師活動がある</p> <p>よりよく生活できるように考えるようになった</p>
3.社会資源の理解	<p>社会資源の職種を理解できていることが役に立っている</p> <p>退院後の生活が想像しやすい</p> <p>退院後の支援方法</p> <p>退院のサポートが必要になるときの制度</p>
4.学生時代に実際にいったこと	<p>地域診断の知識と方法</p> <p>健康教育の知識</p> <p>市のホームページを開いて調査する</p> <p>健康教育で行ったパンフレットづくり</p> <p>やったから、わかっている</p>

「学生時代に実際にいったこと」では、『地域診断の知識と方法』、『健康教育の知識』、『市のホームページを開いて調査する』このことが『やったから、わかっている』と感じていた。

2) 苦労したことや大変だったことは何か

苦労したことや大変だったことについては、「コロナの流行のためオンラインだったこと」、「課題が多い」という2つのカテゴリに分類された（表2-2）。

「コロナの流行のためオンラインだったこと」では、『実習前の教員の事前指導』、『みんなで集まる時間の確保ができない』、『地域の人の背景をつかむ』ことであった。

「課題が多い」では、課題の量が多いことや地域診断や健康教育の準備が大変だったことがあった。

表2-2 卒業後インタビュー調査（苦労したことや大変だったこと）

カ テ ゴ リ	内 容
1. コロナの流行のためオンラインだったこと	<p>実習前の教員の事前指導</p> <p>みんなで集まる時間の確保ができない</p> <p>時間があわず、メンバー間でのバランスを取るのが難しかった。</p> <p>地域の人の背景をつかむ</p>
2. 課題が多い	<p>課題が多くて大変だった</p> <p>個人ワークが大変だった。</p> <p>地域診断・健康教育の準備</p>

3) その他印象に残ったことなど自由意見

チームで行うことで地域診断や健康教育の知識がついたことや将来は保健師としての道があると思えたことが挙がっていた。保健師として就職した学生は、地域診断を行って、健康課題を抽出して活動をしていくことを授業で学び、そのように活動する保健師像を抱いていたが、現実とのギャップに悩んでいるという意見もあった。

IV. 考 察

1. 市町村実習の学び

実習日程が10日間のうち、臨地実習は半日から4日間と施設の受け入れ状況により差異があったが、市町村実習の記録の学びでは、6つのカテゴリに分類された。「保健師の役割」、「信頼関係の重要性」、「地区踏査」、「ネットワークを構築」、「対象の視点」、「健康教育」であった。臨地での体験が少ない中でも、住民とともに考え、住民の力を信じ支えていく地域での「保健師の役割」を理解していた。また、実習先が県内であったことと緊急事態宣言下ではない時期に、担当の地域へ出向き「地区踏査」したことは、既存の情報と「地区踏査」の情報を統合し、何度も検討することで、その地域の特性を理解し健康課題を抽出することにつながることを体験できた。また、担当地域の健康課題に合わせた「健康教育」の計画立案と発表の体験は、指導者や教員からの助言等も含めて、対象者に合わせて工夫することの大切さ^{7) 8)}を学んだ。これらの体験は、保健師活動を行う上での「信頼関係の重要性」を体感し、「ネットワークを構築」することで、住民サービスの充実が図られていること、個人から集団を見ていくという保健師特有の「対象の視点」の重要性も気づくことができた。

2. 卒業生のインタビュー結果からの学びの検討

これらの学びをもって卒業した学生たちのインタビューの結果では、現在よかったと思うこととは、「仲間との協力で困難を乗り越えた自信」「実際に臨地に行ったこと」「社会資源の理解」「学生時代に実際にいったこと」という4つのカテゴリに分類された。コロナ禍であったからこそ学べたという点は、仲間と会えないからこそ、工夫しながらグループワークを行うチームワークの重要性であった。これが、結果的に困難を乗り越えた自信や仲間との協働の大切さという人間の成長を促していたと考える。反対に、つらかった点は、コロナ禍であることから、対面を避け、オンラインでのグループワークや大学での対面であってもソーシャルディスタンスを保ちながらの学内実習であった点であった。しかし、良かった点として「困難を乗り越えた自信」に繋がっていたことから、学生にとって越えられそうな課題である「小さな課題」を学生が工夫し、乗り越えていくことは重要な点であると考ええる。

また、「実際に臨地に行ったこと」や「学生時代に実際にいったこと」によって、市町村保健師の働く

場の雰囲気が理解でき、そのことで「保健師としての将来の道がある」とイメージできたのではないだろうか。臨地実習というその場にいることが大きな学び⁹⁾となることは、どんな状況であっても必要であると考ええる。

実際の退院支援・退院指導の際に「社会資源の理解」があったということが活かされていた。また、健康教育の経験は、何度でも試行錯誤しながら作成していくことが、対象者の健康課題を考え、それを解決するためにはどのようにすればよいのかという姿勢が身についていたと考える。

以上のように、学生時代に学んだ6つのカテゴリである「保健師の役割」、「信頼関係の重要性」、「地区踏査」、「ネットワークを構築」、「対象の視点」、「健康教育」については、卒業後には統合され、保健師の役割である住民との信頼関係を構築し、広い視野で対象者を理解し、多職種間で連携・協働してネットワークを構築していくことが重要であることを通して、自らが保健師となっていくことをイメージしていた。また、「地区踏査」や「健康教育」という経験から学んだことは、保健師だけでなく看護師として就職しても、現在の現場で活かされていた。そして、その延長上に保健師という資格を意識していることが推察された。

しかし、保健師として働く卒業生では、川端ら¹⁰⁾の新人保健師が感じることで明らかにした点である「既習のあるべき姿を実現できない自分に自信を失う」と同様に、現実とのギャップによるリアリティショックを感じていた。学んだことと現場とのギャップについては、平常時でも課題であるといえるが、コロナ禍という状況の影響については今後のさらなる課題である。

3. 現在からみた学びの考察と今後の課題

臨地実習が困難な状況であっても、保健師基礎教育における地域診断や健康教育、家庭訪問という保健師としての技術習得は、臨地実習に近い環境設定を行い、学生が自ら考え企画して実施していく演習を学内で実施していくことが必要であると考ええる。また、沼田¹¹⁾が述べるように、地域保健活動および住民の生活の質の向上という目標に向かって活動していくことや幅広い知識を基礎教育では身につけていくことについては、保健師基礎教育の中において伝えていく必要性は大きいと考える。特に、統合カリキュラムで保健師という資格を取得していく学生は、一度看護師として就職し、その後のキャリアとして保健師を見据えている部分も多分にあるからである。

さらに、卒業後保健師として就職する場合に起こる保健師基礎教育で抱いた保健師活動のイメージとのギャップによるリアリティショックによって迷うことがないように、臨地実習先との連携を密にし、臨地実習の時間が短い中でも習得できるよう今後の検討が必要である。

V. 結論

1. 学生時代の学びは、「保健師の役割」、「信頼関係の重要性」、「五感を使った地区踏査」、「ネットワークを構築」、「対象把握の視点」、「わかりやすい健康教育」、「ニーズに即したサービスの提供」の7つに分類された。
2. 卒業後には、学生時代に体験できてよかったと思っていることは、「仲間との協力で困難を乗り越えた自信」、「実際に臨地に行ったこと」、「社会資源の理解」、「学生時代に実際にに行ったこと」の4つに分類された。
3. 学生時代の学びは、卒業後に統合され、つらかった体験は困難を乗り越えた自信にもなり、自分のキャリアの中に保健師という職種を見据えていた。
4. 「臨地で体験すること」が困難な状況でも保健師としての自覚をもって卒業できるよう、学生時代に

得た知識や技術の継続教育をも視野に入れた大学教育の検討の必要性が示唆された。

Ⅵ. 研究の限界・今後の課題

本研究では、初めて経験する状況の中での実習方法とその後の影響については、一つの知見となったと考える。しかし、対象数が少なく、一般化することは難しいため、今後も、現教育が卒後へどのように影響していくかの研究を重ねていく必要がある。

また、学生・教員ともに教育方法を模索しながら実習を実施したが、感染症の拡大や災害の発生などにより、通常授業や実習が実施できないことは今後も予測される。そのため、通常出ない状況下での授業や実習の活動報告を積み重ね、よりよい保健師基礎教育の探求が求められる。

謝辞

本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、卒業生の皆様に心から感謝いたします。

引用文献

- 1) 厚生労働省（2020）「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000599698.pdf>（2022.10.11 9:00アクセス）
- 2) 文部科学省（2020a）「大学等における新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置の実施に際して留意いただきたい事項等について（周知）」
https://www.mext.go.jp/content/20200420-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2022.10.11 9:00アクセス）
- 3) 文部科学省（2020b）新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について
https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf（2022.10.11 9:00アクセス）
- 4) 日本私立看護系大学協会（2020a）2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果(調査A)
https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyAreport.pdf（2022.10.11 9:00アクセス）
- 5) 日本私立看護系大学協会（2020b）2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果(調査B)
https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyBreport.pdf（2022.10.11 9:00アクセス）
- 6) 渡部幸子，大澤豊子，谷口友子(2021) Covid-19禍における保健師学生の模擬健康教育の実践報告
市町村実習を臨地実習から学内実習に変更して．了徳寺大学研究紀要(15), 49-59.
- 7) 川端泰子，千田みゆき(2020) 行政で働く新任保健師の困難に関する文献検討．埼玉医科大学看護学科紀要, 13(1), 41-47.
- 8) 前掲書6)
- 9) 中田涼子，井上清美，奥野久美子(2017) 新任期に実感する統合カリキュラムにおける保健師基礎教育の課題 選択制教育のあり方を考える．神戸常盤大学紀要(10), 115-122.
- 10) 沼田 加代（2016）保健師教育と保健師現任教育の現状と課題．足利工業大学看護実践教育研究紀要（4），31-41

2022年12月5日 受理
了徳寺大学研究紀要第17号